

ties, recruitment of teachers, management of large classes, and quality of education.

Finally, the authors point out that the search for the appropriate balance is never-ending. Cambodian authorities would be wise to adjust their policies to fit new circumstances and goals and to seek different balances for different populations. This book is strongly recommended for students of comparative education, researchers, educational planners and policy makers in similar countries, NGOs, and international donor agencies.

(Surithong Srisa-ard・Mahasarakham University, Thailand; CSEAS Visiting Research Fellow from March 2007 through September 2007)

関 恒樹、『海域世界の民族誌——フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』世界思想社、2007、iv+364p.

本書は、ポストモダニズムの乗り越えを目指す諸理論を導入して、フィリピン低地キリスト教社会を解釈しようとした野心的なモノグラフである。当該社会は、長い間、「特筆すべき文化がない」地域と言われ、文化人類学的研究の中で等閑視されてきた。だが、本書は、エイジェンシー論などを手掛かりとして、生業と文化の両面から人々の日常実践の姿を分析して社会像の構築を試みている。その対象は、セブ島ダラギット町出身の移動漁民らが構成しているネットワーク・コミュニティである。それは、同町のほか、ビサヤ海に面した10の集落を含む。なお、本書は、著者の博士学位論文が基礎となっている。

評者は、ビサヤ地方サマール島からの向都移動を文化人類学的に研究している。だが、直接「海」を対象とした研究の経験はない。よって、評者が本書を評するのに適任かどうか疑問なしとはしない。しかし、ビサヤ地方においてフィールドワークを行っており、本書の地獄的背景には馴染みがある。そのような観点から、以下、本書の書評を試みたい。

本書は、調査地における生計戦略を描く第I部

(1～3章)と、力にまつわる文化的概念の分析とアイデンティティの構築に関する考察に主眼を置く第II部(4～8章)から構成されている。

序章では、日常実践をキーワードとして、東南アジア海域世界における生活世界の論理を描き出すという目的が述べられている。著者はこれについて、「人々が自己の属するコミュニティに内在する構造や制度、あるいは規範の持つ拘束力とその実在性に常に、既に絡め取られていることを認めつつも、その一方で制度、構造に対する人々の参加、交渉、抵抗、協働などの様々な折衝と働きかけを展開する積極的側面に焦点を当てる」(p. 2)と述べている。

第1章は、漁民たちのネットワーク形成過程を描く。人々は、1920年代ごろを境にして、半農半漁から、集団的漁撈操業を中心とする生活様式へと移行した。近年は、さらに、専門職や海外就労を志向する人々が増えているという。こうした遷移を追うことで、著者は、「漁民の移動性の高さをア・プリオリな与件」(p. 312)とみなし、海洋民の生活様式の独自性と特異性から事象を解釈しようとする先行研究を批判している。これは本書の重要な貢献の一つであろう。

第2章と第3章は、現在の生計戦略に焦点を当てている。第2章は、海という不確実性や危険性の高い外的環境を相手とした人々の生計戦略の詳細を描く。漁法などの技術面よりも、自分たちの持つ社会的資源をいかにうまく組み合わせるかに漁民の工夫の重点が置かれているという著者の指摘は興味深い。例えば、漁撈集団のメンバーシップは決して固定的ではなく、彼らは漁獲量の変動に従って伸縮自在にその編成を組み替えている。さらに第3章では、上記の流動的な組織原理を、アモ(漁撈集団所有者)とタオハン(漁撈集団)の関係から検討し、タオハンが臨機応変に関係をシフトさせ、偏在する「資源」にアクセスしようとする姿が描かれている。

第4章は、調査地における力の概念の基層と考えられる「ドゥガン」を分析している。ドゥガンとは、人と一緒に生まれてくる、目には見えない存在で、各人の力はその強さによって決まるという。したがって、人々は、絶えず強さの異なるドゥガン同士の間引き状態の中に生きていられると考られている。

第5章は、漁民たちと町の名士たちという、明瞭な格差のある関係においてみられる相互交渉を分析し、漁民たちが名士の力に対峙しつつも、移動の過程で得た新たな力の有効性を確認し、提示していくダイナミズムを指摘している。

第6章と第7章は、神、精霊、カトリックの守護聖人等の超自然的存在に内在する力、「ガフム」の概念を軸にして、人々のアイデンティティ構築の過程を検討する。第6章では、故郷の守護聖人との関係を論じる。漁民たちは、故郷の守護聖人のガフムに関する諸知識を用いつつ、その守護聖人との間で相互交渉を行う。その過程で、複数の移動集落と故郷を包む一つのコミュニティが再確認されていくという。第7章は、このガフムが精霊の力に対して用いられる事例に焦点を当てる。故郷の精霊伝承は、漁民たちに故郷のイメージを具体的に想起させ、その中への自らの位置づけを促すと、著者は結論する。

第8章では、人間に附与される超自然的な力、「カラキ」について考察する。ここでは、妖術師と社会的アウト・ローという、いわば共同体の周縁に位置づけられている人々に関する語りを分析している。その結果、双方のカラキとも、漁民たちに何らかの態度表明と位置取りを迫ることで、統合的作用を及ぼしていると論じられる。

終章では、まとめとして次の3点を指摘している。第1に、従来東南アジア海域世界の特徴とされていた「移動ネットワーク」モデルにおける移動とネットワークは、実は構造的・制度的諸要因と漁民の主体との相互規定的関係の間で編み出された産物であること。第2に、ビサヤ海域世界の人々の間でみられる力の観念は、中心から周辺へと放射される一元的なものではなく、「そのような力を具現する他者たちと人々の相互行為を促し、さらにそのような相互行為の過程において解釈し直されてゆく概念」(p.317)といえること。第3に、ビサヤ海域世界の人々のアイデンティティは、このような周囲の力との関係で、自らの位置を決めていく過程の中に見出されるものであること。最後に著者は、自らの研究を、Cannell [1999] や川田 [2003] などとともに、近年始まったフィリピン低地社会研究における社会関係、アイデンティティ、文化概念の捉え直しの試みの一つとして位置付けている。

さて、90年代以降、ビサヤ地域を対象とする民族誌の数は増えてはきている。その発端となったのは、牛島とザヤスが編集した論文集3巻である[Ushijima and Zayas 1994; 1996; 2000]。これらには、本書の著者や、本書の「あとがき」に名が挙げられている日本人若手研究者らも寄稿している。こうして研究が蓄積されつつある現在、ビサヤ地域の生業と文化の両面を取り上げ、一つのビサヤ・コミュニティ論を打ち出そうとした本書が発刊されたことは、まさに時宜を得たことであり、本書は現時点でのビサヤ海域世界研究の水準を示す好著といえよう。

同時に、本書の資料的価値の高さも強調しておきたい。著者は、フィールド調査で得たデータと感覚を重視し、そこから解釈していく姿勢を本書で貫いている。著者が問題としている「ドッグン」などのいくつかの民俗概念は、評者も調査中にその重要性に気付いてはいた。しかし、どうアプローチしたらよいか分からず、そのままにしていた。これらの民俗概念は、地域で発行されている印刷物等で調べても、ほとんど取り上げられていない。にもかかわらず、著者はこれらを丹念に調べ上げている。その結果、本書は、ビサヤやその周辺地域における基礎的民俗概念に関する手引書にもなっている。

ただ、本書第II部で取り上げられているデータの記述・分析方法に関し、若干の疑問を禁じえない。まず、第II部では、多数の興味深い語りを提示し考察しているが、語りそのものに関する説明が少ないことが気にかかる。一例を挙げると、第8章で、社会的アウト・ローとされる人物のカラキについて複数の語りが示されている。しかし、本章で語り手のうちの一人がこのアウト・ローとされる人物のオイダという情報しか見つけることはできなかった。著者がインフォーマントから語りを聞いたときの状況等も記されていない。

次に、多声性と代表性にかかわる点である。序章で、第II部に関するデータは「限られたキー・インフォーマントに絞って(の)集約的なインタビュー」(p.19)から得たと記されている。キー・インフォーマントの声を様々なトピックから引用していることは高く評価される。だが、キー・インフォーマント以外の人たちの声はどうであろうか。また、

インフォーマントは、集団全体の中ではどのように位置づけられる人たちなのか、といった疑問が残った。

この多声性と代表性の問題は、生業と文化の両側面からの分析を試みるという本書の特色を考えれば、なおさら望まれる点といえる。つまり、第I部と第II部を関連づけた分析の可能性についてである。例えば、評者の調査経験から言うと、邪術者や妖術者などの社会的周縁に位置するごとくに語られる人とその語り手が、集団全体の中においてどのような位置関係にあるかを考慮に入れることは重要と思われる。それは、語り手によって、集団内のだれ（あるいはどの家系）が邪術者や妖術者と疑われるかは異なる場合があるからである。本書の調査地でも、そのような複数の語りかたがあるのかどうかは分からない。仮にあるとすれば、邪術者や妖術者とうわさされる人々や語り手自身は、第I部で描かれている漁業の場においては、どの階層や集団に属しているのか、といった情報や分析がもっとほしいところである。

移動ネットワーク集団の一人ひとりの情報を得、さらに互いの関係も調査することは易しくはないだろう。しかし、記述や分析の方法を再考・工夫することによって、結論の説得力を増すことは可能と思われる。

ところで、語句について1点指摘したい。31ページで著者はowner-operatorを「漁撈集団所有者」と訳している。しかし、同じページで著者は、owner-operatorを「漁船、魚網・漁具を所有し、漁民たちを雇用する経営者」と定義している。つまり、所有の対象は生産手段であって、生産に携わる漁民の集

団＝漁撈集団ではない。これは、一見固定的と思われるがちな支配・被支配関係の中でも、人々は相互交渉によって自らの位置取りとアイデンティティを構築しているという、本書の主張の根幹にかかわる。ここでowner-operatorを「漁撈集団を所有している人」と訳してしまうと、著者の主張との間でずれが出てきてしまうと考えられる。

最後に、本書にはビサヤやその近隣地域を扱った多数の文献が参照・引用されている。これは、今後ビサヤ研究をさらに体系化していく必要性の大きさを示している。本書は、その出発点となるであろう。東南アジア海域世界の文化や社会のありかたに関心を持つ読者にとって、必読文献である。

(細田尚美・京都大学東南アジア研究所)

#### 参考文献

- Cannell, Fenella. 1999. *Power and Intimacy in the Christian Philippines*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川田牧人. 2003. 『祈りと祀りの日常知——フィリピン・ビサヤ地方バンタヤン島民族誌』九州大学出版会.
- Ushijima, Iwao; and Zayas, Cynthia Neri, eds. 1994. *Fishers of the Visayas*. Quezon City: CSSP, University of the Philippines.
- . 1996. *Binisaya nga Kinabuhi, Visayan Life*. Quezon City: CSSP, University of the Philippines.
- . 2000. *Bisayan Knowledge, Movement & Identity*. Quezon City: TWSC, University of the Philippines.